＜センター等＞

別紙２

全学内部質保証委員会の意見書

Ⅰ　対象となるセンター等

テニュアトラック推進本部

Ⅱ　自己点検、外部評価実施時期

令和８年１月

Ⅲ　評価結果

１．今回の自己点検・評価は適切に実施されたか

適切に実施された。

２．外部評価は適切に実施されたか（外部評価を実施している場合）

該当しない。

３．センター等の設置目的等や活動は本学及びセンター等の目的・目標等に沿ったものであるか

目的・目標等に沿ったものである。

４．設置目的等を達成する上で，組織，設備，財務等は適切か

規程上、組織は合理的に設置されているが、運用面では十分に機能しているかについて、なお検証の余地があるように見受けられる。また、テニュアトラック教員の研究環境は適切に整備されていると思われるが、研究費の安定的確保に課題がある。

５．活動は本学及びセンター等の目的・目標等の達成に十分に資しているか

現在テニュアトラック教員２名が着任しているという点で一定の活動が認められるが、今後のテニュアトラック制度の活用に向けた中長期的方針や具体的な運用計画が十分に明確化されていない。

６．活動によって人材育成が図られているか

基準 4-2 について専任教員の研究活動の進展を示すエビデンスの提示が十分ではない。

７．内部質保証体制が適切に整備され、機能しているか

規程において「内部質保証体制」を規定しておらず、整備しているとは言えない。また、自己評価にも記載されているように、推進本部の体制と運用について構造的な課題があり、テニュアトラック教員からのフィードバック等による点検・改善をしているか不明のため、内部質保証体制が十分に機能しているとは言い難く、体制整備と運用改善が求められる。

８．外部評価における意見への対応、又は自己点検・評価での課題への対応は適切か（要項 別紙３，別紙４）

適切である。

９．その他、特記すべき点・改善を要する点等

大学の目的に沿ってテニュアトラック教員を採用し、実績を上げてきたことは評価できる。

一方で、自己評価にも記載されているとおり、推進本部がほぼ受入組織としてのみ機能している現状は改善が必要である。大学として若手研究者への研究支援は重要であるが、限られた予算状況を踏まえると、各部門との連携のもと、一定の役割を担いながら研究を推進できる体制の構築も検討に値すると考えられる。各部局にとって、より活用・運用しやすい体制と制度設計が望ましい。

なお、内部質保証の観点とは別に、報告書作成上の留意点として、受動的表現「～されている」と能動的表現「～している」が混在している。自身の施設を「自己」点検するものであるため、報告書の文体は能動的表現に統一すべきである。

１０．上記を踏まえ、センター等の改廃についての意見

（１）専任教員の配置は妥当か

生命科学系と工学系で「各１名の配置」が第３期中期目標の達成としては「妥当」と言えるが、大学全体の目的として「妥当」と言えるかは具体的な指標が示されておらず判断は困難であるため、今後は配置数や採用目標に関する定量的指標の設定が望まれる。財務面の課題がクリアされれば、若手や女性教員の増員には、より多くのテニュアトラック教員の配置が必要と思われる。

（２）現状どおり設置していくことは適切か

若手教員を対象としたテニュアトラック制度自体は意義があるが、実態と乖離した体制になっているように見受けられる。自己評価にも記載されている通り、組織の在り方を含めた抜本的検討が必要と思われる。